

変貌を遂げた北朝鮮！

～金正恩登場は日本に対するメッセージなのか～

(2010年10月23日)

開催が遅れていた北朝鮮の労働党代表者会議が9月28日に開かれた。その前日には、人民軍大将として初めて公式に「金正恩(キムジョンウン)」が表舞台に立った。金正恩の登場で、日米韓を初め多くの国では、「後継者決定！」と報道。以降は金正恩の行動に目を奪われ、10月10日の労働党65周年

記念閲兵式の報道も、新型ミサイルより、金正恩の一挙手一投足に注目したようだ。

だが、党代表者会議の内容に目を向けていた数少ない北朝鮮ウォッチャーたちは、その内容の異様さに衝撃を覚えると同時に、朝鮮半島そのもの、いや東アジア全域に重大事が迫っていることを理解した。

金正日総書記が再度「推戴」された！

かねてから「後継者ではないか」と注目を集めていた三男、金正恩が、9月27日に「朝鮮人民軍大将」という称号で、初めて公的にその名を現した。噂されていた金正恩の登場に、日本はもちろん、米国、韓国のメディアは「金正日総書記の後継者ということ公式化した」と報道。翌日開催の労働党代表者会議で、後継問題に関わる発表があるのではないかと注目していた。

28日の朝には朝鮮中央放送と朝鮮中央テレビが「間もなく重大発表がある」と予告。否が応でも全世界のマスコミの目は北朝鮮に向けられた。そしてついに重大発表が行われた。

……金正日総書記が再度、総書記として推戴されました！

この「重大発表」を聞いて、ガクッとさ

れた方もいるのではないだろうか。

「何が重大発表だ。これまでずっと総書記だった金正日が、総書記に居座ることが、なぜ重大ニュースなのか。金正恩が重要ポストに就任するという発表だと思っていたのに…」

そんな感想を持たれた方もいたことだろう。

金正日が再度、総書記に推戴された……。じつはこれは、まさしく「重大ニュース」だったのだ。

金正日は1972年に党中央委員、1974年に政治委員会(現政治局)委員になっているが、公的に姿を現したのは1980年。このとき金正日は政治局常務委員、中央委員会書記局書記、中央軍事委員会書記に就任している。そして1991年には朝鮮人民軍最高司令官に、1993年には国防委員会委員長に

就任した。

1992年までは、軍の最高司令である「国防委員会委員長」は国家主席が兼任するとされていたのだが、憲法を改正し、主席ではない金正日が軍の最高ポスト「国防委員会委員長」に就くことが可能になっていたのだ。

金正日が国防委員会委員長に就任して、1年3カ月後に金日成が急死する。

この時点で金正日は、国家元首の地位を正式に継承はしなかったものの、事実上の最高指導者として統治を開始した。

金正日が総書記になったのは1997年秋。労働党中央委員会で総書記に推戴された形式をとっている。さらに翌1998年秋に再度国防委員会委員長となり、このときの憲法改正で、国防委員会委員長は「国家の最高職権」と規定された。

金正日は北朝鮮の総書記であり、最高指

北朝鮮が変身した！

今回の党代表者会議で労働党はその規約を改正している。その重要点は3つある。①朝鮮労働党の規定 ②朝鮮民主主義人民共和国の規定 ③朝鮮労働党の目的 の3点だ。

労働党の規定は、これまでは、「朝鮮労働党とは、偉大な首領・金日成同志によって作られた主体的・革命的なマルクス・レーニン主義の党である」とされていた。それが今回の改変で、「朝鮮労働党とは、偉大な首領・金日成同志によって作られた党である」と書き換えられた。

朝鮮民主主義人民共和国については、主体暦を基に作り上げられた「金日成朝鮮」

導者であると、誰もが思っている。しかし振り返ってみると、金正日は正当な形で総書記に就任したことはなかった。

今回、改めて総書記に推戴されたことに対し、中国の胡錦濤国家主席は祝電を贈っている。総書記就任に祝電が贈られたのは今回が初めてのこと。その電文の内容は、「朝鮮労働党が代表者会を成功裏に開催し、最高指導機関を選出したことに祝意を表す」という、北京政府が発信した電文としては、異例なまでに熱烈なものだった。

中国政府は今回初めて、金正日の総書記就任を「正当なもの」と認め、祝電を贈ったわけだ。

その意味で、「金正日が再度、総書記に推戴された」というニュースは重大だった。

しかし北朝鮮の労働党代表者会議の内容は、そんなものを吹き飛ばすほど衝撃的なものだった。

であると、新たに規定している。この「金日成朝鮮」という表現は、明らかに「李氏朝鮮」を意識した表現だ。李王朝に代わって、金日成王朝が出現したと宣言しているようにもとれる。

労働党規約でも憲法でも、北朝鮮は金日成の国家。朝鮮労働党は金日成の党。北朝鮮では国家最高位の「主席」は永遠に金日成であり、金日成は永遠の領袖と規定された。

……このことは何を意味するのか。

重要なのは金日成であり、金正日など「ただの（一過性の）総書記」に過ぎないとしていることだ。それは即ち、金正恩の存在

意義とは何かという問いにもつながる。

さらに労働党の目的は、これまで「社会全体の主体思想化と共産主義社会の建設」となっていたものが、「社会全体の主体思想化と人民大衆の自主性実現」と変えられた。

すでに昨年改正された憲法からも「共産主義」や「マルクス・レーニン主義」の言葉が消えていたが、今回の党規約改正により、北朝鮮という国家から「共産主義」が完全一掃されたといっているだろう。

注目すべきは、北朝鮮の当面の目標とし

党人事の透明化

今回の党代表者会議が終わったところで、北朝鮮ウォッチャーたちが驚いた事実がもう1つあった。それは党人事の透明化……人事の完全公開である。

これまで北朝鮮では、政治局委員や政治局候補などの氏名や経歴、職歴などを外部に出すことは、ほとんどなかった。ところが今回は政治局メンバー88名全員の氏名、年齢、経歴どころか顔写真まで公表しているのだ。

ちなみに文官は全員大卒で、そのかなりの数が金日成総合大学卒業者。武官も全員大卒で、多くが金日成軍事大学出身者だ。明らかに「実務家優先、学歴優先」の方針が見てとれる。

これまで北朝鮮では、革命世代、戦争世代の大物が党運営、経済運営に口を挟むことも多かった。極論を言えば、農業のこと

胡錦濤政権との協調

金正日は今年5月と8月に中国を訪問し

て、「北部では強盛大国を建設し、南部では民族の解放、民主主義革命を実現する」としている点だ。

これが何を意味しているか、解説する必要もないだろう。南部とは、北朝鮮が「南朝鮮」と呼んでいる韓国のこと。つまり北朝鮮は明確に、韓国から米軍を追い払い、韓国を「解放する」と宣言しているのだ。それは「強盛大国の大門を開く」ときに同時に行うことを暗示している。

をあまり知らない将校クラスが、「この土地でトウモロコシを栽培しなさい」といった命令を下していたのだ。こうした不都合を取り除き、実務家をトップに据え、階級が高くても無能の人間は、現場から完全排除した。

政治局のメンバーに女性が2人ほど顔を見せている。1人は金敬姫。ご存じの通り金正日の実妹で、人民軍大将の肩書を持つ。彼女は軽工業を担当する労働党部長に就任している。もう一人は金洛姫。国際経済大学卒の77歳で、農業担当の労働党部長。彼女はこれまで数多くの農業生産分野で実績をあげた実力派と評価されている。

この「党人事透明化」一つを見ても、今回の党代表者会議により、北朝鮮が完全に生まれ変わり、新しい体制を敷いたことが理解できる。

ている。8月には、吉林・長春・ハルビン・

牡丹江・図們と、東北三省（旧満洲）をぐるりと一周したが、中国の国家主席・胡錦濤はわざわざ長春まで出向いて金正日を歓迎している。

右肩上がりの好景気をバックに、北京五輪、上海万博と順調に、あるいは力づくで押し上げた中国政府。しかしこのところ、バブル経済崩壊に対する危機感、所得格差や失業に対する不満、政治改革を求める民衆の圧力、さらには民族独立運動と、茨の道が続いている。そんな苦悩を一気に吹き飛ばすのが、東北三省の「長吉図開発計画」で、胡錦濤政権は全勢力を傾けてこれを成功させようとしている。

2012年に国家主席の座を習近平に譲っても、胡錦濤は中央軍事委員会主席として、かつての鄧小平のように権力を振るおうとしているが、そのためには東北三省開発計画は絶対に成功させなければならない。

長春～ハルビンにかけてのベルト地帯は、コウリャンやトウモロコシの産地だが、同時に地下資源の宝庫でもある。この地の農

金正恩登場の意味

8月末に金正日一行が吉林、長春、ハルビンなどを訪問した際に、“後継者”金正恩が同行したか否かが話題になったことがあった。北朝鮮側は、随行者の全リストを、あらかじめ中国に提出していたが、その中に金正恩の名は無かったことが確認されている。では金正恩は同行しなかったのか。……信頼できる情報筋の話としては、「金正恩氏は間違いなく同行されていました」とのことだ。

この情報筋の話によると、8月26日に金

産物や資源を、陸路輸送するのではなく、豆満江（図們江）経由で羅先（羅津・先峰）に送り、羅津港から大連に運ぶことが重要。羅津港の使用権を手に行っている中国としては、北朝鮮の協力が不可欠なのだ。

その北朝鮮は、「思想大国」「軍事大国」「経済強国」を目指して呻吟している。

「思想大国」は「主体思想」で完成されたと考えられる。

「軍事大国」もこれまでの「先軍政治」により完成したといえる。

「経済強国」については、遅延、足踏みどころか、非常に苦しんでいる。活況を呈する中国経済の力を借りて、何とか「経済強国」を実現したいというのが、北朝鮮の本音だ。

中国・胡錦濤政権の東北三省開発計画と連動し、北朝鮮を経済強国に押し上げたいと、金正日は本気で考えている。ただし本音の部分で、金正日が中国を信用していないことは明らかでもある。

正日一行は吉林の毓文（いくぶん）中学を訪問し、金正日、正恩父子は、非常に長時間、地下壕に入り込んだという。この地下壕とは（真実か否かは別として）、金日成主席が若いころ、日本軍に追われて逃げ込んだとされる壕。金正日は、息子・金正恩に「革命の原点」を再確認させたのだと考えられる。

9月28日の党代表者会議と、10月10日の党創建65周年記念閲兵式では、金正恩の動画、写真がさまざまな形で報道された。

初めて金正恩の顔や姿を目にした人々は、金日成にそっくりな姿を見て仰天したことだろう。

髪型から顔かたちまで金日成主席そっくりの金正恩の登場。これこそ、金正日による“最高の演出”ではなかったのか。

金日成の“革命の原点”に同行させ、金日成そっくりの姿で人民の前に登場させたことに、後継者＝金正恩の“正統性”を強調する意味があったと考えられる。

金正恩を登場させた意味を“ウラ読み”する見方もある。元公調のM氏や元内調のS氏など、北朝鮮の事情に精通した情報通たちは、異口同音に金正恩の登場は、「日本に対するシグナル」「日本に対するメッセージ」だと分析する。

金正恩がなぜ「日本に対するメッセージ」なのか。これについてアジア情報に詳しい作家・北一策氏は次のように分析する。

「韓国・朝鮮では日本人をチョッパリと

呼んで差別する。在日朝鮮人のことはハンチョッパリと呼び、これもまた差別の対象だ。さらに半島では古くから済州島の人々を差別してきた歴史がある」

（注：チョッパリとは本来、馬、牛、豚など蹄がある家畜のこと。足袋を履く日本人を蹄に例え家畜扱いする言葉。）

「金正恩の母は済州島出身で在日だった高英姫。済州島ハンチョッパリの高英姫の子、しかも三男坊が、国家のNO. 1になることなど、“信じられない”というのが、朝鮮だけではなく中国人まで含めた北東アジア圏の実感。正恩が後継者となるかどうかの判断は、まだできないが、この時点で彼を表に出した意味合いとして、日本に対するメッセージ性を感じざるを得ない。

では具体的に、どんなメッセージが秘められているのか。

「日朝国交正常化を強く求めているというメッセージ」（北一策）だというのだ。

資源の宝庫を求めて

中国の胡錦濤政権は、東北三省開発計画と連動させて、北朝鮮との関係強化を図ろうとしている。だが北朝鮮に触手を伸ばしているのは、中国だけではない。

北朝鮮には地下資源が豊富にある。また北朝鮮は、金融マーケットとしては完全に白紙状態で、その意味でも魅力の国家だ。さらに、中央アジア資源の“輸出港”としての存在も価値がある。ロシアのウラジオストックなどは北朝鮮と非常に近距離にあるが、冬には凍って使えない。羅津港は、この地域最北の不凍港なのだ。

金正日は実際のところ、北朝鮮の経済復

興を、中国ではなく日本にやってもらいたいと考えている。

その理由はいろいろあるが、第一に金正日の中国嫌い。第二として、日本から植民地支配や戦争の賠償金という形をとって、無償で莫大なカネを引き出せると考えているからだ。かつて北朝鮮のインフラを整備したのは日本であり、ハード面だけではなく、ソフトの面も信頼度も、日本が圧倒的だという点もある。

戦前、朝鮮半島北部から旧満洲にかけての地域は、重工業地域として、莫大な資金、技術等が注ぎ込まれた。工業地帯のエネル

ギー源として、北朝鮮にも6基の巨大発電ダムが建設され、これらは現在も稼働している。また北朝鮮各地に大工場を建設し、新技術の開発も推し進められた。

余談になるが、北朝鮮の新義州には日本鉱業と三井金属の工場があり、三井金属では終戦間際に、「ゼロ戦や隼を凌ぐ軽量戦闘機を試作していた」という実話もある。実際にジュラルミン合金の超軽量戦闘機が製作されたが、実戦には間に合わなかった。最近発行された三井金属の「社史」にも、その開発に従事した研究者たちの思い出話が載っている。彼らと一緒に研究開発に取り組んだ、当時十代の優秀な朝鮮人青年たちとの交流も書かれている。

北朝鮮が日本に経済援助を求めていることは、世界中が理解している。そして、日本が北朝鮮に手を出さないように、世界中が監視しているのが現状だ。

1965年に日韓基本条約が締結され、日本から有償・無償を含めて8億ドルの資金が韓国に渡った。これで韓国は国家崩壊の危機を乗り越え、浮上することができた。ところが、日本の資金が提供されると同時に、日本の技術・やり方、日本の“考え方”が韓国を席卷し、韓国経済は結果として日本に呑み込まれてしまった。(詳細は本紙「激動の東アジア！荒海の中、日本が進むべき方向は？」参照)

北朝鮮には戦前、戦中に日本が置き残した電力ダムや工場などの設備がある。現在の北朝鮮の大衆の中に、日本的な“ものの考え方”がなお残っている。たとえば新義州の三井金属で働いていた優秀な若者は、いま老人となって、北朝鮮の重工業を指導する立場にいる。そんな北朝鮮に、日本が

接触したり、戦時賠償金の名目で日本のカネが渡ったら、たちまち北朝鮮は日本経済圏に呑み込まれてしまう。

……それだけは絶対にさせない。

それが中国の本音であり、米国、英国、ロシア……いや全世界の本音なのだ。

かつて日本が、国内外の反対を押し切って朝鮮を併合したウラには、「円経済圏の拡大」という野望があった。その野望達成のために、半島は日本に併合され、満洲も日本の勢力下に置かれた。「円経済圏」確立のために設立されたのが「朝鮮銀行(第一銀行韓国総支店→韓銀→鮮銀)」(後の日本債権信用銀行、現あおぞら銀行)であり、朝鮮銀行は満洲、朝鮮一帯に1000を越える支店網を作り、円経済圏拡大に邁進した。

日本の敗戦により、朝鮮銀行は清算され、円経済圏は消滅した。二度とこれを復活させない。それは世界の“覚悟”だと考えてよい。

それを理解したうえで、金正日北朝鮮は金正恩を登場させた。

2002年9月に平壤を訪れた小泉純一郎は、「拉致問題の解決なくして日朝国交正常化交渉はない」とブチあげ、国民世論の賛同を得た。ところが今や、この言葉が日本全体を呪縛している。

中国が北朝鮮に急接近し、ロシア、英国は虎視眈々と北朝鮮を窺い、米国もすでに裏ルートで北朝鮮に橋頭保を築いているとされる現在、日本だけが蚊帳の外に置かれている。拉致問題の解決と日朝国交正常化交渉は、同時に進めても決して不都合はない。なぜその英断を行わないのか。

尖閣諸島沖での漁船の領海侵犯、海保巡視船との衝突事件を巡り、日中が微妙な関

係にある。米中間選挙の状況、NATOに出席したメドベージェフの本音、円の独歩高……。2010年、世界はいよいよ混乱混迷の度合いを深め、舵を切り間違えれば奈落の底に落とされそうな状況にある。こんな状況下、わが国の情報部門は多忙を極めているという。当然のことと思ったのだが、現場の声を聞いて唾然となった。

「政権中枢から下される命令は、『小沢一郎の動向を調査しろ』『小沢派の××を徹底マークしろ』……。国家の危急存亡の折りだというのに、官邸は権力闘争のことしか考えていない」。

このボヤキが真実だとしたら、庶民は本気で立ち上がらなければならない。 ■